

授産施設 様変わり

知的・身体障害者たちの働く場である授産施設が変わろうとしている。来月一日に前橋、富岡で新しい授産施設が相次いでオープンする。だれでも気軽に立ち寄れる喫茶室の設置や、独自性を強く打ち出した業務内容が特徴。とかく閉鎖的に思われがちだった同施設のイメージをぬぐい去り、積極的な社会参加を試みる同施設の取り組みに注目が集まっている。

喫茶室備えオープンに

「ワークハウスすてっぷ」・前橋

社会福祉法人「すてっぷ」が前橋市東上野町に開く「ワークハウスすてっぷ」が前橋市東上野町に開く。陶芸、木工などの軽作業からコンピュータによる委託ホームページの製作・管の一角に喫茶室を設置。メンバーが作った焼き立てパンや手作りアイスを提供する。室内には木の絵本や木製おもちゃで遊べるコーナーもあり、幼児連れでも気楽に利用できる。

独自製品開発で自立へ

「水士舎」・富岡

開催も計画。喫茶室以外にも、メンバーと住民の交流を重視している。鈴木施設長(46)は「住民との接点を増やし、互いの理解を深めたい」と話し、県障害政策課は「障害者が地域に溶け込んで働ける環境作りは、評価すべき取り組み」と活動の広がりに対する期待を寄せる。授産施設内の喫茶室設置は、九八年に開所した知的障害者授産施設「とも」(前橋市上増田町)に次いで県内二件目。

富岡市後賢にオープンする知的障害者授産施設「水士舎」(総合施設)では、メンバー二十二人が四十五種類のハムソーセージ作りやジャムの製造、平飼いニッポン鶏などに取り組む。ハム・ソーセージは香辛料から製法まで、本場ドイツの技を忠実に再現。ドイツからマイスターを招き、メンバー個々の技術指導も行う徹底ぶりだ。ジャムはフランスの有名メーカーと技術提携し、七十二種類のレシピを入手。初年度は、



開所に向けて技術を磨く水士舎のメンバー

地元産の材料を使って四種類のジャム作り挑戦する。長引く不況で多くの授産施設が仕事不足に頭を抱える中、水士舎には都内の有名デパートや各地の飲食店から問い合わせが寄せられている。金谷施設長(50)は「今までの授産施設は障害者を無力視し、自助努力を怠ってきた。仕事がもらえないなら、取れる工夫をすべからず働き方を強め、プロの仕事を教えることでメンバーの能力を伸ばし、彼らの真の自立支援につなげていきたい」と意気込んでいる。